

平成 2 9 年 度

研究紀要

第 1 3 号

秋田県立横手清陵学院
中学校・高等学校

H 2 9 研究紀要 (第 1 3 号) 目次

1 研究授業および校内研修の記録

(1) 中学校指導主事訪問 (数学、体育、社会、理科)

指導主事計画訪問	・・・ 1
伊勢谷 昭則	・・・ 2
赤平 吉秀	
佐越 俊和	・・・ 7
神谷 忠昭	
佐藤 貴之	・・・ 12
小田島 宏	・・・ 16

(2) 高校指導主事訪問 (英語)

萩原 勢津子	・・・ 20
--------	--------

2 探究活動について

瀬々 将吏	・・・ 23
-------	--------

3 年次研修の記録

(1) 高等学校初任者研修

三浦 俊喜	・・・ 27
-------	--------

(2) 高等学校5年経験者研修

高橋 恵	・・・ 29
------	--------

(3) 高等学校授業力向上研修

高橋 恵	・・・ 31
------	--------

(4) 高等学校中堅教諭資質向上研修

栗津 奈々	・・・ 32
-------	--------

1 研究授業および校内研修の記録

(1) 中学校指導主事訪問

数学、体育、社会、理科

(2) 高校指導主事訪問研究授業

英語

平成 29 年度 指導主事計画訪問

研究主題

問題を発見し,豊かな関わりの中で
主体的・対話的に問題を解決しようとする生徒の育成

1 期 日 平成 29 年 7 月 20 日 (木)

教 科 特別支援教育 数学科

指導者 南教育事務所
南教育事務所

指導主事 阿部 裕子 先生 (特別支援教育)

指導主事 赤川 渉 先生 (数学科)

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
5	1 年 B 組	1 年 B 組 教 室	数学科	文字と式	伊勢谷 昭則 赤平 吉秀

2 期 日 平成 29 年 10 月 4 日 (水)

教 科 保健体育科

指導者 南教育事務所雄勝出張所

指導主事 村田留美子 先生 (保健体育科)

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
5	1 年 A 組 B 組	第 1 体育館	保健体育科	体を動かす心地よさを感じ, 体力を高めていこう! (体づくり運動)	佐越 俊和 神谷 忠昭

3 期 日 平成 29 年 11 月 7 日 (火)

教 科 理 科 社会科

指導者 南教育事務所仙北出張所
南教育事務所雄勝出張所

指導主事 島田 智 先生 (理 科)

指導主事 小坂 靖尚 先生 (社会科)

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
5	1 年 B 組	コンピューター室 2	社会科	「中世の日本」 ～産業の発達と民衆の成長～	佐藤 貴之
	2 年 B 組	化学実習室	理 科	「天気とその変化」 前線の通過と天気の変化	小田島 宏

第1学年B組 数学科学習指導案

指導者 伊勢谷 昭 則 (T1)

赤 平 吉 秀 (T2)

1 単元名 文字と式

2 目 標

- (1) 文字の式を用いて、数量やその関係を表そうとしたり、読み取ろうとしたり、文字式の計算に進んで取り組もうとしたりする。 【数学への関心・意欲・態度】
- (2) 文字式を用いるよさを考えたり、文字式の計算の仕方をこれまでに学習した数の計算をもとにして考えたりすることができる。 【数学的な見方や考え方】
- (3) 数量やその関係を文字式で表したり、その意味を読み取ったり、計算したりすることができる。 【数学的な技能】
- (4) 文字を用いるよさや文字式の表し方のきまりなどを理解している。 【数量や図形などについての知識・理解】

3 生徒と単元

(1) 生徒の実態

①本単元に関する実態について

男子17名、女子16名、計33名の学級である。明るい雰囲気の中で前向きに学習を進めている。数学をやや苦手としている生徒もいるが、教師の支援や級友の協力を得ながら授業内容を理解しようと努力している。グループや全体による学び合いでは、答えだけでなく理由まで含めて説明することができる生徒はまだ少数である。

右の表は、本単元のレディネステストの結果である。具体的な数量を文字を使って表す問題(①②)、式の値を求める問題(③④)は概ねできているが、文字式が表している数量を読み取る問題(⑥)で正答率が5割に届かなかった。

問 題	正答率
① 1個80円のパンを x 個買ったときの代金を表す式	88%
② ①の代金を1000円札で支払うときのおつりを表す式	85%
③ $x + 8$ の x に4をあてはめる計算	97%
④ $x \times 5 + 6$ の x に4をあてはめる計算	94%
⑤ 縦が a cm、横が b cmの長方形で、 $a \times b$ はどんな数量を表す式か	82%
⑥ 縦が a cm、横が b cmの長方形で、 $2 \times (a + b)$ はどんな数量を表す式か	49%

②特別な教育的支援が必要な生徒について

(省略)

(2) 単元について

小学校算数科では、数の代わりとして□、○を用いて式に表したり、数量を表す言葉や□、○の代わりに a や x などの文字を用いて式に表したり、文字に数を当てはめて調べたりすることを学習している。本単元では、数量の関係や法則などを、文字を用いて式に表したり、式の意味を読み取ったり、文字を用いた式の計算をしたりして、文字を用いることによさについて学習する。文字を任意の数を代表している変数としてみる見方を育て、その上で、文字を用いていろいろな数量を表すことにより、簡潔で、一般的に表現できる文字を用いるよさに気付かせることができる。意欲的に文字を活用していく姿勢を育てることのできる単元である。

このあとの単元である「方程式」や「比例と反比例」において、数量の関係を文字式で表したり、関係を式から読み取ったり、文字を使って形式的に操作して課題を解決したりする。そこで、文字式の有用性を更に実感していくためにも、本単元の学習内容である文字式の表し方や計算ルールの理解が必要不可欠である。文字使用に徐々に慣れさせながら定着を図っていく必要がある。

(3) 指導にあたって

①単元の目標等の達成のために

文字を変数として捉えさせるために、マッチ棒や基石の問題、面積図を用いた問題などを教材として取り上げる。それらの問題を具体的な数で考えさせたり、図を利用したりしながら規則性を捉えさせることで、「変数」であることを明確に意識させたい。それを文字を使い、式で表すことによって、簡潔で、一般的な表現ができる文字使用のよさに気付かせたい。また、文字式の表し方や1次式の計算などでは、知識や技能の習熟に陥りやすいが、どのような既習事項を用いたのかを質問したり、明記させたりすることで、理由や根拠を意識して発言できるようにしたい。そして、文字式の表し方や計算の仕方を理解させ、技能に習熟させていきたい。

②特別な教育的支援が必要な生徒への配慮について

集中して話を聞くことができず、問題の意図を把握することが困難である生徒に対しては、問題を段階的に提示し、切り返しの発問をするなどして題意を把握させていきたい。疑問に思ったことを素直に話す生徒の声を生かして課題設定を行い、学習意欲の向上を図っていきたい。抽象的な概念の理解が困難である生徒には、具体的な数で考えさせたり、具体物を使って支援したりするなどしていきたい。空間認知力が弱い生徒がいるため、一斉学習では平面図形の題材を用い、単元のまとめの習熟度別少人数学習の際に、空間図形の題材を扱っていきたい。

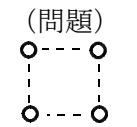
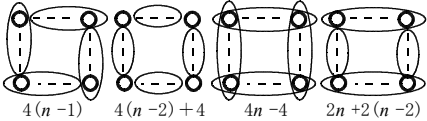
4 単元の指導計画（文字と式 19時間）

節	項	時	主な学習活動	主な指導形態	評価規準（評価方法）			
					関心・意欲・態度	見方や考え方	技能	知識・理解
文字を使った式	1 文字の使用	① ②	<ul style="list-style-type: none"> ・マッチ棒の本数を求める式を、いろいろな考え方で求める。 ・文字を使うことよさを理解し、数量を文字を使って表したり、文字式の意味について考えたりする。 	TT	①マッチ棒の本数の求め方に関心を持ち、図や式で求め方を考えようとしている。	①マッチ棒の求め方について、他人の考えを読み取って考え方を説明したり、式をつくったりすることができる。	②具体的な数量を、文字を用いて式に表すことができる。	②数の代わりに文字を用いることで、数量や法則を一般的に表現できる文字使用のよさや、文字式が操作と操作の結果の両方を表しているということを理解している。
	2 文字を使った式の表し方	③ ④	<ul style="list-style-type: none"> ・文字式での積や累乗の表し方を理解し、それにしただって式を表す。 ・文字式での商の表し方を理解し、それにしただって、式を表す。 	TT			③④文字使用のきまりにしたがって、式を表したり、具体的な数量を文字式に表したりすることができる。	③④文字を使った式の積や商の表し方のきまりを理解している。
	3 代入と式の値	⑤ ⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・代入と式の値の意味を理解し、文字式に数を代入して式の値を求める。 ・代入を利用して、具体的な場面の値を求める。 	TT	⑥身の回りの事象について、代入が活用されていることに関心を持ち、問題を解決しようとしている。	⑤文字に数を代入することの意味やその結果を、具体的な事象にもどって考えることができる。	⑥文字式に数を代入して式の値を求めることができる。	⑤代入することの意味や式の値の意味を理解している。
文字式の計算	1 1次式の計算	⑦ ⑨ ⑩ ⑪	<ul style="list-style-type: none"> ・項、係数の意味を理解し、文字の部分が同じ項をまとめたり、1次式の加減を計算したりする。 ・1次式と数の乗法や除法を計算する。 ・1次式のいろいろな計算をする。 	TT	⑦項や係数に関心を持ち、1次式の計算方法を考えようとしている。	⑧～⑩文字の部分が同じ項をまとめる計算や1次式の加減の計算方法などについて、既習事項や日常の場面と関連づけて、その計算方法を考えることができる。	⑧～⑪1次式の加減や1次式と数の乗除の計算ができる。	⑦項、係数の意味を理解している。

3 文字式の利用	1 式が表す数量	<p>⑫ 本時</p> <p>⑬</p> <p>⑭</p> <p>⑮</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・式の意味を読み取り、図を使って考え方を説明する。 ・単位をそろえて数量を式に表したり、割合、速さに関する数量を文字を使って式に表したりする。 ・πの意味を理解し、円周の長さや円の面積をπや文字などを使って表す。 ・文字式の表している数量を読み取る。 	T T	<p>⑮文字式が表す数量を読み取ることに興味をもち、式の意味を考えようとしている。</p>	<p>⑫基石の個数の求め方を式に表したり、図を使って説明したりすることができる。</p> <p>⑮図形の中の数量や整数などを表している文字式の意味を読み取り、事象を考察することができる。</p>	<p>⑬単位の異なる数量の和や差、割合、速さについて、数量を文字式に表すことができる。</p> <p>⑭πを使って、円に関する数量を文字式に表すことができる。</p>	<p>⑬πの意味とπをふくむ文字式の表し方のきまりを理解している。</p> <p>⑭単位の異なる数量の和や差は単位をそろえて表すことを理解している。</p>
	2 関係を表す式	<p>⑯</p> <p>⑰</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・等式、不等式、右辺、左辺、両辺の意味を理解し、数量の間の関係を等式や不等式で表す。 ・等式や不等式で表された関係を読み取る。 	T T	<p>⑰等式や不等式が表す数量の間の関係を読み取ることに興味をもち、具体的な場面で式が表す意味を考えようとしている。</p>	<p>⑰等式や不等式が表す数量の間の関係を読み取ることができる。</p>	<p>⑯数量の間の関係を等式や不等式で表すことができる。</p>	<p>⑯等式、不等式の意味を理解している。</p>
単元のまとめ		⑱⑲		習熟度別 少人数指導				

5 本時の指導計画 (12 / 19)

- (1) ねらい 基石の個数の求め方を式に表したり、図を使って説明したりすることができる。【数学的な見方や考え方】
 (2) 学習過程

時	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
0	1 本時の問題を把握する <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> (問題) 図のように、基石を並べて正方形をつくります。このとき、1辺に n 個の基石を並べたときの全体の基石の個数を求めなさい。  </div>	T T (補助型)	T 1 : 問題を提示する。 T 2 : 1 辺が 2 個、3 個、4 個、 n 個のときの図を順に提示する。 T 1 : T 2 の図に合わせて、1 辺の個数と全体の個数を聞く。	
3	2 本時の学習課題を確認する。	T T (補助型)	T 2 : 1 辺が n 個のとき、全体の個数を求めにくくなったことから、全体の個数の求め方についての課題意識を生徒から引き出す。 T 1 : 学習課題を板書する。	
5	(学習課題) 1 辺が n 個のとき、どのように基石の個数を求めたらよいだろうか。			
8	3 解決の見通しを立てる	T T (補助型)	T 1 : 以前に学習したマッチ棒の本数を求める問題を解決したときに、図を使って棒のまとまりをつくり、それを式に表せば解決できたことを確認する。	
10	4 自力で解決の方法を考える。 	T T (分担型)	T 1 : 全体の生徒の解決方法やつまずきを把握する。 T 2 : 特別な支援を必要とする生徒を中心に支援し、解決方法やつまずきを把握する。 T 1 T 2 : それぞれが把握した情報を共有し、集団思考に取り上げる考えや取り上げ方を確認する。	
20	5 集団で解決方法を考える。	T T (補助型)	T 1 : 求め方を表した式又は図を提示する。 T 2 : 提示した式又は図をもとに求め方を考えさせる。支援を要する生徒のつまずきに合わせて、他の生徒に説明を求めたり、切り返しの発問をしたりして、まとめにつながるキーワードを引き出す。 T 1 : 図と式を同じ色で関連付けるとともに、キーワードを板書する。	
40	6 本時の学習をまとめる。	T T (補助型)	T 1 : 板書をもとに、各自学習のまとめをするように指示する。	
	(まとめ) まとまりをつくって個数を n を使って表し、不足分を加えたり、重なった分を引いたりして求める。			
43	7 適用問題を解く。	T T (分担型)	T 1 : 窓側の生徒の解決状況を把握する。 T 2 : 廊下側の生徒の解決状況を把握する。	
48	8 振り返りをする	T T (補助型)		

・ 基石の個数の求め方を式に表したり、図を使って説明したりすることができる。
【数学的な見方や考え方】
 (評価問題)

第1学年A・B組 保健体育科学習指導案

指導者 T1 佐越俊和

T2 神谷忠昭

1 単元名 「体を動かす心地よさを感じ、体力を高めていこう！」(体づくり運動)

2 目標

- (1) 体づくり運動を通して、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、体力を高め、目的に適した運動を身に付け、組み合わせることができるようにする。体ほぐし運動では、心と体の関係に気付き、体の調子を整え、仲間と交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うこと。体力を高める運動では、ねらいに応じて、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高めるための運動を行うとともに、それらを組み合わせて運動の計画に取り組むこと。 【運動】
- (2) 体づくり運動に積極的に取り組むとともに、分担した役割を果たそうとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。 【態度】
- (3) 体づくり運動の意義と行い方、運動の計画の立て方などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。 【知識、思考・判断】

3 生徒と単元

(1) 生徒について

男子33名、女子33名の学習集団である。本校は中高一貫教育校であり、1年生は20数校の小学校から入学してきている。中学校生活も6ヶ月が経過し、互いを知り交流も深まってきている。ほとんどの生徒が学習課題にそって運動に意欲的に取り組んでいるが、学習課題をあまり意識できなかったり、他との関わりを苦手としたりする生徒がいる。

体育学習については、約90%の生徒が「好き」と答えている。その反面、「運動が苦手」と意識している生徒もあり、その理由として、「できないと周りに迷惑がかかる」「できないことを見られると恥ずかしい、嫌な気持ちになる」ということをあげている。

体づくり運動に関しては、体ほぐし運動を小学校で学習し、入学当初の学習においても、仲間づくりを主目的としてレクリエーション的な運動を実施している。ゲーム性のある運動では、競争をしながら仲間と楽しく運動しようとしていた。体力を高める運動に関連する体力面を見ると、新体力テストの結果では、全体的に県平均を下回り、特に「上体起こし」「反復横とび」の項目が劣っている。

「態度」に関しては、年度当初は、時間に対するけじめの意識が薄く、用具の準備や後片付け等、他人任せにしてしまったりする場面が見られた。また、話し合いが十分に行われずに、学習が停滞する場面があった。しかし、これまで学習してきた、陸上競技、水泳、バレーボールを通して、学習規律・学習方法が徐々に身に付き、自分のすべき学習や役割に責任をもって取り組むことや、仲間と関わりながら学習を進めようとする姿勢も見られるようになってきている。

「知識、思考・判断」に関しては、これまでの学習において、ペアやグループの学び合いにより、技能と関連付いた知識が定着してきている。また、少しずつではあるが自分の考えをもち、他にも広げようとする様子が見られる。

(2) 単元（運動の一般的特性）について

体づくり運動は、体ほぐしの運動、体力を高める運動で構成され、自他の心と体に向き合って、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、心と体をほぐしたり、体力を高めたりする運動である。したがって、それぞれの運動の目的や意義を理解しながら行うことが大切であり、また、他と関わって学習を行い、心や体について気付くことが重要である。他の様々な運動領域でも必要とされる点が多く含まれており、これからの自分の健康や安全に気を配るとともに、今後の体育学習や実生活で生かすことができるようにすることが求められる。学習を共有し、互いの心と体を意識し、共に進められるようにすることを大切にしたい領域である。

(3) 指導にあたって

運動面では、互いの体への気付きを重視して、学び合いのある学習過程になるように運動メニューを提示して見通しをもたせた上で、ペアやグループでの学習を主として取り組ませていく。また、今回の学習が、日頃の体育学習や普段の生活での自分の健康生活や体力の維持・向上に目を向けるきっかけとなるようにし、他の領域・単元でも意識して運動することができるようにしていきたい。

①思考や態度が変容する「深い学び」の実現に向けて

知識、思考・判断の面では、どのような運動がどのような体力を高める運動につながるかを提示し、自分の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。そのために体力を高める運動の導入では、前期に実施した新体力テストの結果をもとに、どのような体力向上を目指していけばよいのかを各自に意識させたい。また、3・4・5時間目では4つの体力に関する運動例や運動の仕方を具体的に示し、知識の定着のための時間とする。6・7時間目では、身に付いた知識をもとにより自分が目指す体力の向上に向けた運動の組み合わせ方や自分の体力に応じた運動の回数や時間を工夫させ実践させたい。また、運動の質や取組を高め、深い学びにつながるように、友達計画を見て参考にしたり、友達にアドバイスしたりするなどのコミュニケーションを大事にさせる。

態度の面では、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、体力を高め、目的に応じた運動を身に付け、組み合わせることで積極的に取り組めるように促していきたい。計画した運動に応じて、どのような役割を果たせばよいかを考えさせ、責任をもって行わせるようにする。

②一人一人に学びの充実感を味わわせる授業に向けて

学習課題に対する意識の低い生徒がいるため、ペアでの学習を中心に行うこととし、他からアドバイスしてもらったり、リードしてもらったりするなどして、援助してもらえようようにしていく。他との関わりを苦手とする生徒もいるため、そうした生徒に配慮しながら、教師側でペアリングをする。また、自分の学習がより仲間から認められるように、ペア同士で声をかけ合ったり、学習カードにお互いのがんばりを記入したりさせる。そのことが自分の取組やその成果の実感につながるようにしていきたい。

4 指導と評価の計画（8時間）

時	1	2	③	4	5	6	7	8
学習の段階	学習の見通しをもつことができるようにする	体ほぐしの運動の意義を理解し、運動する	運動例の実施・体力を高める運動に取り組む			組み合わせて、体力を高める運動に取り組む		学習の成果を確認する
学習の流れ	○単元の目標を知る ○学習の進め方を知る ○体づくり運動の意義について知る ○体ほぐしの運動 ○学習カードの記入の仕方について知る	○体ほぐしの運動の実際と実施（対）	体ほぐしの運動					
			○「体の柔らかさを高める運動」の行い方を知る ・ペアで協力しながら行う ○「力強い動きを高めるための運動」の行い方を知る ・ペアで協力しながら行う	○「巧みな動きを高めるための運動」の行い方を知る ・ペアで協力しながら行う	○「動きを持続する能力を高めるための運動」の行い方を知る ・ペアで協力しながら行う ○運動の計画の立て方を知る ○体力を高める運動の計画を立てる（主）	○運動を組み合わせたたり、回数や時間を選択したりして、体力を高める運動を行う（主・対・深） ・立てた計画を実施してみる ・検証し、修正を加えながら実施してみる	○自分に合った体力を高めるための運動の実施と学習のまとめ（主・深） ○学習カードのまとめ	○単元の振り返り
○本時のまとめ・振り返り ○次時の課題の確認								
指導内容	態度	①仲間と協力して行うことの大切さや一緒に運動することの楽しさや学習の仕方を知ること。	②分担した役割を果たしながら、仲間と対話しながら行っていくこと。					
	思考判断		①体ほぐし運動のねらいを踏まえて、課題に応じた運動の取り組み方を工夫すること。	②③それぞれの運動のねらいや行うことの意義を理解しながら、運動の組み合わせ方を見付けていること。	③自分に合った組み合わせをしたり、選択したりし、効果の上がる計画を立てること。	④仲間と協力しながら、安全に気を付けて行うこと。		
	技能							
	知識	①体づくり運動を実施することの意義について知ること。		②体力を高める運動の行い方について知ること。		③運動の計画の立て方を知ること。		
評価機会	関		①	② ←		→		
	思		① ☆		② ☆	③ ☆ ←	④ ☆ →	③ ☆
	知	① ☆		② ☆ ←	→	③ ☆ ←	→	① ☆

(主) 主体的な学び (対) 対話的な学び (深) 深い学び

← → 観察評価期間

・評価方法は主に観察による (☆学習カードによる)

学習活動に即した評価規準	運動への関心・意欲・態度	①体づくり運動の学習に積極的に取り組もうとしている。 ②仲間と協力し、楽しく運動することができる。 ・仲間の学習を援助しようとしている。 ・健康・安全に留意している。
	運動についての思考・判断	①体ほぐしのねらいである「心と体の関係に気付く」、「体の調子を整える」、「仲間と交流する」ことを踏まえて、課題に応じた活動を選んでいる。 ②関節や筋肉の働きに合った合理的な運動の行い方を選んでいる。 ③ねらいや体力に応じて効率よく体力を高める運動の組み合わせ方やバランスよく高める運動の組み合わせ方を見付けている。 ・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。 ④仲間と学習する場面で、学習した安全上の留意点を当てはめている。
	運動の技能	/
	運動についての知識・理解	①体づくり運動の意義について、理解したことを言ったり、書き出したりしている。 ②運動例の主な効果や運動の仕方について書き出している。 ③運動の計画の立て方について、理解したことを言ったり、書き出したりしている。

(数字は1年次、・は2年次)

5 本時の実際 (3/8)

(1) ねらい

- ・体力を高める運動について、運動例を実施し、主な効果について知ることができるようにする。【知識・理解】
- ・仲間と協力し、楽しく運動することができるようにする。【態度】

(2) 学習過程

学 習 活 動	形態	指導上の留意点	評価 (評価方法)
1 ウォーミングアップを行う。 ・ランニング ・体ほぐしの運動	一斉 グループ ペア	・体ほぐしの運動の意義を確認し、心身ともにリラックスさせ、楽しい雰囲気で行えるようにする。 ・体ほぐしの運動では、互いの今日の調子について会話できるようにする。	
2 本時の学習課題と学習内容を確認する。 「体力を高める運動について、どのような運動があるのか知ろう！」	一斉	・それぞれのねらいに応じた運動が、新体力テストのどの種目に関連するかを指導する。	
3 ペアで活動に取り組む。 ①「体の柔らかさを高めるための運動」 ②「力強い動きを高めるための運動」	ペア	・ねらいに応じた運動例について行い方を示し、正しく行えるように指導する。 ・学習の支援が必要と思われる生徒に対して活動の様子を観察し、アドバイスができるようにする。	○仲間と協力し、楽しく運動することができる。 【態度】(観察)
4 本時のまとめをする。 ・学習カードに記入する。 ・取り組みについて振り返る。	ペア 個 一斉	・ペアや個での振り返り、学習カードの記入を行わせ、記入と同時に振り返りの交流ができるようにする。	○運動例の主な効果や運動の仕方について、書き出している。 【知識・理解】(学習カード)

第1学年B組 社会科学習指導案

指導者 佐藤 貴之

1 単元名 「中世の日本」～産業の発達と民衆の成長

2 目標

- (1) 中世の諸産業の発達が民衆の生活や社会の変化に大きく影響を与えたことを意欲的に追究している。 【社会的事象への関心・意欲・態度】
- (2) 古代と比較して、中世の民衆の生活に変化が見られたことを、諸産業の発達や自治的な仕組みの成立、多様な文化の形成などの視点から多面的・多角的に考察し、自分の言葉で表すことができる。 【社会的な思考・判断・表現】
- (3) 諸産業の発達の様子や社会の変化を絵図などの各種資料から適切に読み取ることができる。 【資料活用の技能】
- (4) 農業や手工業などの技術の発達が民衆の生活を向上させ、自治的な仕組みの形成につながったことを理解することができる。 【社会的事象についての知識・理解】

3 生徒と単元

(1) 生徒について (男子17名 女子16名 合計33名)

社会科に対する関心は比較的高く、意欲的に学習に取り組む生徒が多い。特に歴史的分野に関心が高く、出来事の内容を捉え、歴史の流れをつかむ学習を好む生徒が多く見られる。一方で、出来事の結果や影響について多くの視点から考える活動や、出来事が発生した理由の根拠を明らかにしながら説明する活動を苦手と感じている生徒が多く見られる。

このような生徒の状況から、古代の学習では、学習のまとめの際に「古代の日本を変えた8つのキーワード」を挙げさせ、さらに、その挙げたキーワード一項目に対して関連する内容をさらに8つ書き出すという活動を行った。「マンダラート」という思考整理法である。この活動を行ったことで、歴史の事象同士を関連付けたり、共通点や相違点に着目しながら捉えたりするなど、多面的・多角的に考察し、表現する力を育成する機会となった。まだ十分に知識や思考を整理できない生徒も見られるため、社会的事象の背景や関連性を考察する活動をさらに充実させ、生徒に多面的・多角的な視点から歴史的な事象を大観する力を高めさせたいと考えている。

また、郷土の歴史に対して関心がある生徒が多くいることもわかってきた。横手盆地が舞台となった「後三年合戦」を小学校段階から学んだり、漫画を通して関心を抱いたりする生徒が多くいるためだと考えられる。しかし、「後三年合戦」の次に知っている秋田の出来事や人物について問いかけると、秋田藩主佐竹氏のことが出てくるのみであり、中世の事象については全く知識がなく、空白の時期であるということもわかってきた。中学校段階において、郷土史に関わる詳細な知識は必要とはしないが、「後三年合戦」から「佐竹氏」までをつなぐ県南地域の歴史の接続を、中世の武士や民衆の成長と関連させながら扱い、関心を高める機会を意図的に設けていきたいと考えている。

(2) 単元について

本単元は、歴史的分野(3)「中世の日本」中項目イを基に構成した単元である。中世は武家政権の成立を背景とした政治・経済・文化の転換期であると言える。特に民衆の生活においては、農業における米の収穫量増加と農村の集団化、手工業や建築技術の発展に伴う職人集団の形成、商品流通による都市や定期市の形成・発展など、諸産業の大幅な変化が見られる時期である。また、民衆の生活の変化を背景として、都市や農村における自治的な仕組みが成立し、社会の変化に大きな影響を与えている。古代における律令制のもとでの負担を強いられた閉塞感のある生活とは異なる状況であると言える。

そこで、この単元の学習全体を通して、古代の民衆の生活との比較から、諸産業の発達や都市の形成や自治的な仕組みの成立など多くの変化をもたらされたことに気付かせたいと考えている。そして、社会の変化や影響を関連付けたり、比較したりしながら追究することによって、生徒が中世の民衆の生活の特色を多面的・多角的に捉え、「社会的な見方・考え方」を深めることにつながると考えている。

(3) 指導にあたって

◎中学校における歴史分野の「社会的な見方・考え方」の育成について

新学習指導要領において、歴史的分野における「社会的な見方・考え方」は、「社会的な事象を時期・推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたりして社会的な見方・考え方を働かせる。」と表されている。そこで、今回中世の産業の発達と民衆の成長を扱うために、古代との比較を通して課題追究に臨ませたいと考えている。

単元を学ぶ前段階として、「古代の民衆の生活に大きな成長は見られたか。」という課題を設け、古代の民衆の生活を大観する学習を行う。生活の工夫や負担感、不安感などを多面的に捉え、民衆の立場になって古代の状況を評価するためである。そして、中世においても、産業の発達や都市の発達を網羅的に扱うのではなく、「古代と比べ、中世の民衆の生活に大きな変化は見られたか。」という中心課題を設け、産業や都市の形成、仏教の布教、文化の普及など中世の民衆に関わる内容について追究させていく。そして、追究した結果を、古代でも用いた「マンダラート」を取り入れ、多面的・多角的に調査内容を整理させたいと考えている。また、追究の結果を発表を通して共有化し、諸産業の発達や都市の発展が中世の民衆の生活を大きく変化させ、社会を動かす原動力となっていくことに気付かせたいと考えている。

◎主体的・対話的に活動し、学びを深めるための工夫について

中世の民衆の生活を多面的・多角的に大観する活動をより深めるために、「中世の県南地域でも諸産業の発達や都市の発展は見られたか。」という問いを投げかけ、学びを深める材料とした。具体的に考えるために、「あなたが中世の県南地域に住む〔小野寺氏・農民・商人〕だったら、どこに町や村、市いちを作るか。」という課題をグループ内で検討する活動を取り入れたい。支配者視点の小野寺氏、生産者視点の農民、交易者視点の商人いずれかの立場を選び、それぞれの立場で町や市の立地条件を考えるようにする。そして、交通や交易、地頭などの勢力関係などを基に立地場所を探る活動である。選択の際に、県南地域に勢力を誇った小野寺氏など地頭の勢力関係を確認したり、城下町や門前町、定期市など中世諸都市や産業の発展理由を確認したりしながら選択の材料とさせたい。支配する側の武士の視点や産業の担い手であった民衆の視点など多面的・多角的な見方につながると考えている。そして、既習内容の関連付けや根拠を明らかにして説明する力の育成にもつながるものと期待している。また、郷土の歴史を扱うことによって、郷土への関心を高めさせる効果もねらいたいと考えている。

4 全体計画（総時間数 8 時間 本時 8 / 8）

時	ねらい	主な学習活動	評価規準	努力を要する生徒への手立て
1	○古代の民衆の生活の特徴を、農耕の広まりや律令制による生活への影響などと関連付けて多面的に考察し、自分の言葉で表現できる。	<ul style="list-style-type: none"> 古代の民衆の生活を変化させた4つのキーワードを挙げ、関連することを表にまとめる。 古代の民衆の生活の特徴を自分の言葉でまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 古代の民衆の生活に影響を与えた事象を理解している。【知識・理解】 古代の民衆の生活に影響を与えた事象を参考にして、多面的・多角的に古代の民衆の様子を大観し、説明している。【思考・判断・表現】 	<ul style="list-style-type: none"> 自分が古代で生活していたらどのように感じるかなど、民衆の目線にたって考えてみるよう助言する。
2 3	○「一遍上人絵伝 福岡の荘」の絵図から、中世の定期市の様子を読み取り、古代の民衆の生活と比較することで、追究課題を考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 「一遍上人絵伝 福岡の荘」を読み取り、物や人、立地や市の様子などを挙げる。 なぜ読み取りのような様子が見られるか、仮説を立て、追究課題を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 中世の民衆の生活に関わる絵図から、当時の諸産業の特徴について読み取っている。【技能】 古代の民衆の生活と比較して、中世の生活に変化が見られた理由を予想し、追究課題を考えている。【思考・判断・表現】 	<ul style="list-style-type: none"> 品物や市の様子など読み取るポイントを助言し、作業を促す。 絵図の読み取りを通して抱いた疑問を表現できるよう、文例を提示する。
学習課題：古代と比べ、中世の民衆の生活に大きな変化は見られたのだろうか。				
4 5	○中世の民衆の生活に関わる事象を様々な資料を参考に調査・分析し、追究課題を解決することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 中世の民衆の生活の様子を以下の視点を中心に調査し、学習シートにまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> 農業の発達と暮らしへの影響 商工業の発達と暮らしへの影響 諸産業の発達と市や都市の形成との関連性 武士の暮らし 民衆と仏教との関わり 中世における身分制度 など 	<ul style="list-style-type: none"> 追究課題の解決を目指し、意欲的に調査している。【関心・意欲・態度】 文献や絵画資料など幅広い資料を読み取り、課題を解決している。【技能】 	<ul style="list-style-type: none"> 個人調査ではなく、グループによる調査とし、解決のための調査項目や調査手段などの事前計画を話し合うよう指示する。
6 7	○諸産業の発達や都市の形成、民衆の生活の変化など、中世の民衆の生活の変化を発表を通して共有化し、その特色を理解することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 追究課題毎に調査結果を「中世民衆マンガラート」にまとめ、関連する内容を説明しながら発表する。 調査の結果を発表し合い、古代と比べて民衆の生活がどのように変化したか共有化する。 古代の民衆の生活と比較した生活の工夫度や負担感、活気度などをレーダーチャートで評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> 諸産業の発達や都市の形成など、民衆の生活に関わる内容を多面的・多角的な視点から捉え、発表している。【思考・判断・表現】 中世の民衆の生活に影響を与えた事象を理解している。【知識・理解】 	<ul style="list-style-type: none"> 発表を聞く側が要点を整理することができるよう、思考整理法を用いた学習シートを工夫する。 事前に古代の評価をさせ、その評価と比較しながら中世の評価をするよう助言する。
8 本時	<ul style="list-style-type: none"> ○古代と比較して中世の民衆の生活が変化した理由を、諸産業の発展や社会の変化などと関連付けて説明することができる。 ○中世の都市の発展条件を参考にしながら県南地域における中世諸都市の発展を予想し、中世の郷土の歴史に関心を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 「中世民衆マンガラート」や「レーダーチャート」を参考にして、中世の民衆の成長や社会への影響について自分の言葉でまとめる。 中世の県南地域でも諸産業の発達や都市の発展は見られたか予想し、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 古代と比較して中世の民衆の生活が変化した理由を、諸産業の発展や社会の変化などと関連付けて説明している。【思考・判断・表現】 中世の都市の発展条件を参考にしながら県南地域における中世諸都市の発展を予想し、中世の郷土の歴史に関心をよせている。【関心・意欲・態度】 	<ul style="list-style-type: none"> 中世の民衆の生活に対するイメージをプラス・マイナスの両面から考えるよう助言する。 都市発展の条件などを振り返りながら拠点の選択をするよう助言する。

5 本時の指導計画 (8/8)

- (1) ねらい
- ・古代と比較して、中世の民衆の生活が変化した理由を、諸産業の発展や社会の変化などと関連付けて説明することができる。
 - ・中世の都市の発展条件を参考にしながら県南地域における中世諸都市の発展を予想し、中世の郷土の歴史に関心を持つ。

(2) 学習過程

学習活動	指導の手立て・留意点	○評価規準 [評価方法] ・努力を要する生徒への手立て
1. 前時の活動をふり返り、学習課題を確認する。	・発表シートなどを教室掲示し、前時までの活動の様子を振り返ることができるようにする。	
学習課題：古代と比べ、中世の民衆の生活に大きな変化は見られたか。		
2. 中世民衆の生活の変化と影響についてまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までにまとめた「中世民衆マンガラート」と「リーダーチャート」を関連付けて、生活の変化と影響をまとめるよう指示する。 ・ねらいに迫る表現をしている生徒に発言を促し、中世の民衆の成長の様子を共有化する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめの記入が滞っている生徒に対して、中世の民衆の生活に対するイメージをプラス・マイナスの両面から考えるよう助言する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>○古代と比較して、中世の民衆の生活が変化した理由を、諸産業の発展や社会の変化などと関連づけて説明している。 [シート・発表] 【思考・判断・表現】</p> </div>
3. 中世の県南地域でも諸産業の発達や都市の発展は見られたか予想し、発表する。 —— 学習内容を深める「問い」	<ul style="list-style-type: none"> ・鎌倉時代に地頭に任命された小野寺氏について簡単にふれ、勢力を雄勝郡から県南地域に拡大した様子を説明する。 	
あなたが中世の県南地域に住む [小野寺氏・農民・商人] だったら、どこに町や村、 ^{いち} 市を作るか。		
A・B：沼館，角間川 →河川交通型 C・D：増田，浅舞 →街道，交通拠点型 E・F：横手，湯沢 →城下町型	<ul style="list-style-type: none"> ・支配者視点の小野寺氏，生産者視点の農民，交易者視点の商人いずれかの立場を選び，それぞれの立場で町や村，市の立地条件を考えるようにする。 ・県南地域の航空写真を加工し，地形や河川の様子，街道，寺院分布，中世の城跡（館跡）分布などの資料を準備する。 ・拠点となりそうなポイントを事前に6つほど示しておき，グループごとに話し合い，立地の条件を参考に根拠を明らかにしながら選択するよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「中世民衆マンガラート」などを見て，城下町や門前町，定期市の発展の条件などを振り返りながら拠点の選択をするよう助言する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>○中世の都市の発展条件を参考にしながら県南地域における中世諸都市の発展を予想し，中世の郷土の歴史に関心を寄せている。 [シート・発表] 【関心・意欲・態度】</p> </div>
4. 現代と中世のつながりを考えるために，現在の増田の町並みや浅舞の朝市のVTRを視聴する。	<ul style="list-style-type: none"> ・中世を起源とする都市の代表例として，増田と浅舞を取り上げ，現在の発展につながっていることに関心を持たせる。 ・九斎市や十二斎市の様子がわかるようにする。 ・町並みと寺院（曹洞宗）との関わりにもふれる。 	

第2学年B組 理科学習指導案

指導者 小田島 宏

1 単元名 天気とその変化 (前線の通過と天気の変化)

2 目 標

- (1) 気象観測，天気の変化，日本の気象に関する事物・現象に進んでかかわり，それらを科学的に探究するとともに，自然環境の保全に寄与しようとする。
【自然現象への関心・意欲・態度】
- (2) 気象観測，天気の変化，日本の気象に関する事物・現象の中に問題を見だし，目的意識をもって観察，実験などを行い，事象や結果を分析して解釈し，自らの考えを表現することができる。
【科学的な思考・表現】
- (3) 気象観測，天気の変化，日本の気象に関する事物・現象についての観察，実験の基本操作を習得するとともに，観察，実験の計画的な実施，結果の記録や整理など，事象を科学的に探究する技能の基礎を身に付けることができる。
【観察・実験の技能】
- (4) 観察や実験などを行い，気象観測や天気の変化，日本の気象に関する事物・現象について基本的な概念や規則性を理解する。
【自然現象についての知識・理解】

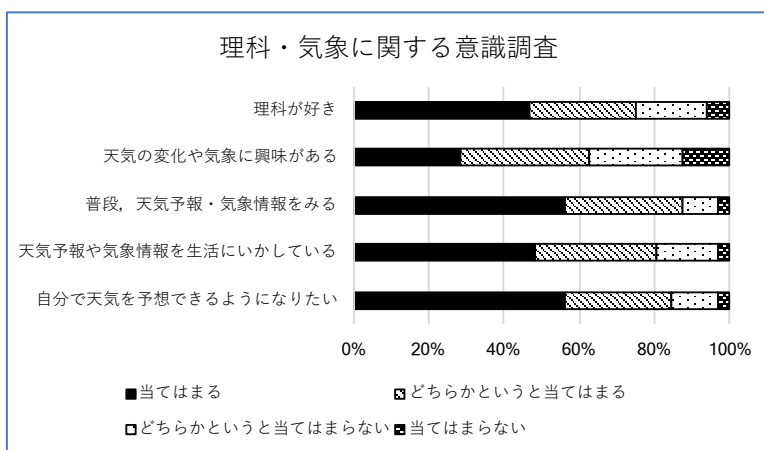
3 生徒と単元

(1) 生徒の実態(男子20名，女子12名，合計32名)

理科の学習にはとても意欲的であり，問いかけに対して非常に活発に自分の考えを述べるができる。実験や観察をすることを非常に楽しみにしており，目を輝かせて取り組んでいる。その反面，発表したり，得られた結果を関連づけて考察する場面では，順序立てて論理的に説明することには難儀する生徒もいる。

気象に関する意識調査の結果より，生徒は気象情報などを気にかかけ，活用している意識はある。しかし，雨具を準備したり着衣を調節したりするなど，具体的な行動にはあまり結びついていないのが実状である。

本単元の学習に入ってから，地上天気図や高層天気図などを提示しながら現在の天気や今後の天気の変化を解説したところ非常に興味を示し，気圧配置と天気の変化の関係をおおよそ把握できるようになってきた。そして，さまざまな観測データなどを根拠として予想することが大切だとの意識も芽ばえている。



(2) 単元について

本単元は身近な気象の観察、観測を通して、気象要素と天気の変化の関係を見いださせるとともに、気象現象についてそれが起こる仕組みと規則性の認識を深めることをねらいとしている。小学校4年生、5年生で気象観測の方法や、1日の気温の変化と天気の関係や天気の変化の特徴について学習している。

気象の変化は日常の現象であり、大変身近なものであるが、その変化のようすは不規則であり、自分では予測が困難だとの意識が強い。また、自分で見渡すことができる範囲が広いように見えても、気象の変化をとらえるという観点では非常に限定的な小さな空間に過ぎない。天気図、気象衛星の雲画像など、マクロな視点からの考察が必要である。気圧配置や前線の通過、天気図や気象要素の情報と関連づけて考察することにより、気象の変化がある程度規則的に起きること、さらに、自分でもおおよその予想をすることが可能であることをとらえる必要がある。そのため、適切に読みとった情報を関連づけ、論理的に統合する力を育成する、生徒の実態に鑑みて重要な単元である。

(3) 主体的・対話的な学びのために

本単元の学習では、毎時の導入として当日午前3時の天気図を提示し、解説している。現在の天気がどのような要因からなっているか、気象用語を用いて解説することで、気象の変化を身近なものにとらえるようになってきた。また、理科室前に天気図を継続的に掲示し、気圧配置にはある程度規則的な変化があること、気圧配置が似ている日は同じような天気になることから、天気の予想が可能になることをとらえる工夫をしている。これらの継続的な情報提示が興味・関心を高め、主体的な態度で本単元の学習に取り組むことに寄与するものと考えられる。

日本は世界でも四季の変化が明瞭で、特に秋田県南部は夏の高温、冬の豪雪など、季節の変化が世界中で最も明確な地域である。そのような地域であるからこそ、気象の変化をとらえることが、健康で快適な生活を送ることに直結する。近年は極端な気象の変化により、強風、豪雨、洪水、豪雪などの気象災害が多発している。この単元の学習は防災意識を高め、自分の命を守るだけでなく、周囲の人々の命を守る一助になる。本時に提示する資料は気象の変化がより身近なものになるよう、横手のアメダスポイントの観測値で議論することとした。また、寒冷前線通過に伴う変化が典型的に現れている状況の日を選び、無理なく予想できるよう配慮し、主体的な学習を保障したい。

学習シートを工夫し、個の予想、グループでの学び合い、さらに全体での検証結果を記入できるように準備する。対話的な学びの中で自己の変容をとらえることを可能にしたい。また、一人一人に小さなホワイトボードを利用させ、メモとして考えを記入することで生徒個々の考えを外化し、共有できるように支援する。また、グループの学び合いを集約するために大きめのホワイトボードも利用できるようにする。その際、「・・・のために・・・である」という話型を活用し、根拠を明らかにした説明がしやすいように配慮する。

4 全体計画 (前線とそのまわりの天気の変化 6時間 本時6/6)

時	項	ねらい・学習活動	評価規準			
			関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	知識・理解
1	1 気団と前線	気団と前線の性質を知り、天気との関係を理解する。 ・性質の異なる空気が接したときの様子を観察し、前線と前線面に相当することを考察する。		・前線の形成について実験の結果から、自らの考えをまとめ、表現することができる。		・気団について説明することができる。 ・前線の概念を理解し、説明することができる。
2		前線の種類について理解し、温帯低気圧の基本的な概念について理解する。 ・前線の断面図から寒気と暖気が接して前線が形成されていることを考察する。		・前線のまわりに雲ができやすいことについて、上昇気流と関連づけて考察することができる。		・温帯低気圧について基本的な概念を理解し、説明することができる。
3		前線と天気の変化の関係を理解する。 ・前線の構造図から、前線が通過するときの天気の変化を考察する。 ・温帯低気圧3Dペーパークラフトを作成し立体構造を把握する。	・前線の通過に伴う天気の変化を、日常生活との関連でとらえている。			・寒冷前線と温暖前線の通過に伴う天気の変化を説明することができる。
4					・温帯低気圧3Dペーパークラフトを作成し、温帯低気圧の立体構造を把握できる。	
5	2 前線の通過と天気の変化	前線が通過するときの気象の変化を読みとる。 ・グラフから前線通過時の気象要素の具体的な変化を読みとる。		・前線が通過したときの天気の変化について科学的に考察し、判断している。	・前線が通過したときの気象要素の変化の様子をグラフから読みとることができる。	
6 (本時)		前線の通過と気象要素の変化を考察する。 ・天気図や気象衛星画像をもとに前線通過時の気象要素の変化を予想する。		・気象要素の変化を前線の通過と関連づけて考察できる。		・前線の通過と気象要素の変化を説明することができる。

5 本時の指導計画

(1) ねらい 寒冷前線の通過に伴う気象要素の変化を、根拠をあげて説明することができる。【科学的な思考・表現】

(2) 学習過程

学習活動	指導上の留意点	評価規準 ・努力を要する生徒への手だて
<p>1 ウォームアップ 当日 03 時の天気図をもとに現在の天気の原因を考える。(主)</p> <p>2 本時の学習課題を把握する ある年(2016年)の9月6日午後の気象要素の変化を根拠を明らかにして予想する課題であることを確認する。(主)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前線や高気圧、低気圧がおおむね西から東に移動することを把握する。 天気は予想可能であることを確認する。 <p>9月5日、6日、7日の地上天気図、高層天気図 9月6日の正午の気象衛星画像 9月6日の正午までの横手の気象データを配付する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">9月6日の午後、横手ではどのように気象が変化したのだろう</div>	
<p>3 課題解決の見通しを立てる 気象の変化を予想するためには何に着目すればいいか考え、グループで確認する。(主・対)</p> <p>4 グループで課題を解決する データを活用して、根拠を明らかにして予想する。(対)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 天気、気温、降水、風向について予想することを確認する。 考えられる要素を小ホワイトボードに個々に記入し、グループで検討する。 <ul style="list-style-type: none"> 「・・・ために・・・になる」の話型で説明し、根拠が明示しやすいようにする。 可能であれば数値を用いて説明するように促す。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">気象要素の変化を前線の通過と関連づけて考察することができる。 【科学的な思考・表現】</div>
<p>5 予想を発表する 予想の発表を聞き、自分の予想や根拠と比較する(対)</p> <p>6 実際の気象要素の変化と比較する 実際の横手の気象要素の変化と比較し、予想が正しいか検証する。(主)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 書画カメラを利用して学習プリントをスクリーンに提示し、数人に予想を発表させる。 自分の予想と比較し、加筆、修正する点があれば学習プリントに記入する。 <ul style="list-style-type: none"> 学習プリントに実際の気象要素の変化を記入する。 寒冷前線が通過したときの気象の変化を、キーワードを用いて記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 寒冷前線の通過が考えられることを指摘し、変化を予想させる。

英語科「コミュニケーション英語Ⅰ」学習指導案

実施日時：平成29年8月30日（水）2校時

場 所：1年5組教室

対 象：1年5組（総合技術科）

授 業 者：教諭 萩原 勢津子

ALT マリー エマニュエル

教科書：Power On（東京書籍）

1 単元名 Lesson 5 Banana Paper（バナナペーパー）

2 単元の目標

- (1) バナナに関する情報、バナナペーパーの製造工程、バナナペーパー製造がエンフエ村にもたらしている影響について関心をもち、意欲的に聞いたり読んだりする。
- (2) 分詞の形容詞用法、S+V（be動詞以外）+CとS+V+O+Cの文構造を理解する。
- (3) 世界の抱える諸問題の解決に貢献できる日本の知恵や技術について考え、意見を述べる。

3 単元とCAN-DO形式での学習到達目標との関連

前もって発話することを用意した上で、メモを見ながら、一連の簡単な語句や文を使って短い話をするができる。【Spoken Production 高1(CEFR-J 2.1)】

4 単元観

本単元は、身近な果物であるバナナの意外な事実を題材にして、発展途上国の貧困問題と日本の関わりについて説明している。もの作りや科学技術への関心が高い生徒が多いので、世界が抱える問題と日本の知恵や技術を結びつけさせ、その解決策について考えさせたい。扱われている言語材料は、分詞の形容詞用法と第2文型、第5文型である。物の様子を説明したり、感想を述べたりする場面でよく用いる文法事項なので、実際に使用させながら理解させたい。

5 生徒観

中学生の時から英語に対する苦手意識をもっている生徒が多いが、発音練習やペア活動など英語を使用する活動には積極的に取り組んでいる。また、本校にはALTが常駐しているため、多くの生徒はALTに親しみを感じながら接している。しかし、中学校での既習事項が定着しておらず、伝えたいことを適切な語と文で表現することに困難を抱えている生徒が多いので、細かい支援が必要である。そのため、授業では、扱う言語材料の中から生徒の生活において使用頻度の高いものを優先して取り上げ、繰り返し使用させることにより定着を図っている。また、生徒が不安なく英語を使用できるように、英語でやり取りする必然性のある場面設定、ALTとJETによるモデルの提示、使えそうな語句・表現・構文の紹介などを心がけている。1学期の後半には、シンプルな対話活動であれば、生徒同士で気軽にやり取りしている様子が見られた。

6 単元計画（総時間6時間）

- 1時間目・・・バナナに関する情報・知識を確認する、Part 1（内容把握）【本時 1/6】
- 2時間目・・・Part 1（内容確認）、Part 2（内容把握）
- 3時間目・・・Part 2（内容確認） Part 3（内容把握）
- 4時間目・・・Part 3（内容確認）、Summary、Exercises
- 5時間目・・・「世界に貢献できる日本の知恵と技術」について話し合い、発表原稿を作成する
- 6時間目・・・ALTに「世界に貢献できる日本の知恵と技術」について発表する

7 単元の評価規準

A コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知 識・理解
バナナに関する情報、バナナペーパーの製造工程、エンフエ村の変化について関心を持ち、理解しようとしている。 ALTに自分の考えを伝えようとしている。	バナナについて聞いたり読んだりした情報を英語で伝えることができる。 世界に貢献できる日本の知恵や技術について、自分の考えを英語で発表することができる。	バナナに関する情報、バナナペーパーの製造工程、エンフエ村の変化について要点をとらえることができる。	バナナペーパーの製造とエンフエ村の変化、日本が果たした役割を理解している。 分詞の形容詞用法、第2文型・第5文型における補語の働きを理解している。

8 本時の学習

(1) 目標

バナナに関する情報を英語で伝えることができる。

(2) 指導計画

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	・好きな果物についてペアで意見交換する。	・ALTとJETで対話モデルを提示する。 ・机間指導をして、全員が英語で意見交換できるように支援する。 ・相手に伝わるように、はっきりと大きな声で話させる。	
展開 40分	<p>・本時の目標を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">Let's give the information about bananas in English.</div> <p>・バナナから連想すること、思い出すことを述べる。 ・ALTによるOral Introductionを聞き、クイズに答える。 ・新出単語の意味と発音を確認する。 ・本文を1回黙読し、分からない語句の意味を確認する。 ・もう一度本文を読み、バナナに関する情報を拾い、メモに加える。 ・ペアでバナナに関する情報を伝え合う。 ・本文にあるバナナに関する情報を全体で確認する。 ・本文の音読練習をする。</p>	<p>・モデルセンテンスを提示する。 ・メモの使い方を周知させ、情報をメモしながら聞くように促す。生徒の反応を観察し、語句説明やヒントを加える。 ・大きな声で発音させる。 ・読解活動が滞らないように、既習語句であっても質問があれば全体で意味を確認しておく。 ・机間指導をして、つまづいている生徒を支援する。 ・情報を伝えるためのモデルを提示する。 ・相手に伝わるように、発音、声の大きさ、スピード、アイコンタクトに注意させる。 ・抜けていた情報があれば、メモさせる。 ・①ALTのリピート、②個人練習で取り組ませる。</p>	B / C
まとめ 5分	・本時の活動を自己評価する。	・授業を振り返って、自己評価させる。	

【評価】

- ・バナナに関する情報を的確に捉えることができる。
- ・バナナに関する情報を英語で伝えることができる。(観察・ワークシート)

英語科研究協議会記録

記録者 佐藤 梨奈

授業者（萩原）より	<p>教科書本文の内容が、総合技術科の生徒が興味を持ってそうな内容のため、時間をかけて扱っていきたいと思っている。クラスの特徴は、英語は好きだが、英語でのコミュニケーション活動になると、文で答えられないという生徒が多い。高校卒業段階で最低限身についてほしい内容を念頭において授業をしている。毎時の英語の時間では帯活動として英語での疑問文の作り方、答え方をさせている。ALT との TT は本時で3時間目であるが、協力して授業を組み立てていっている。本時の授業に関しては、ALT のプレゼンテーションを取り扱うことで、教科書本文以外の Authentic な材料を提供することができた。反省点としては、本文 Reading をする際の指示が曖昧だったため、戸惑う生徒が出てきたことである。</p>
授業者（マリー・エマニュエル）より	<p>クラスの雰囲気がよく、とてもいいバランスのクラスである。バナナに関するプレゼンテーションを行う際に使用した PC では、見やすく、文字が多すぎないように配慮した。メモをとる活動の際に気づいたが、多くの生徒が単語のスペルを書けない、もしくは間違っていたので、次回の授業でスペルについてカバーしたいと思う。</p>
英語科教員からの感想など	<ul style="list-style-type: none"> ・ Authentic な材料を使って生徒の興味を惹きつけていた。 ・ 聞いて、メモをとるというように、目的のある Writing 活動にもなり、大変勉強になった。 ・ 授業内の classroom English も徹底されていた。生徒の発話量も多かった。 ・ メモをもとに、相手と話すために必要な言葉 “as you know~”などを学べる点も良かった。 ・ 帯活動もとても良い。T/F クイズでは、自分の答えに自信のない生徒が周りを見て答えを判断しないように、True は左手、False は右手、というように一度に全員に答えさせる手法を使う方法もあるのではないかな。 ・ 帯活動の疑問文作り、答え方、をこれからも続けてほしい。授業に一貫性があった。 ・ ALT のプレゼンを聞いて、メモを聞き取る内容よりも、教科書の内容の方が簡単なはずだが、なぜか教科書の内容はあまりメモできていなかった。なぜか。 ・ 初めから終わりまで、とてもよいバランスの授業であった。
指導主事より	<p>ALT によるバナナのプレゼンがとても良かった。生徒を惹きつけ、内容も楽しいものであった。新出語句の発音の際、生徒が混乱する発音があったため、次回の授業でカバーしてほしい。本時の授業においては、生徒がメモをもとに友達と話す活動の時間をもう少しとって良かった。先生方の質問で、理解しやすいはずの本文の内容をメモできている生徒が少なかった点については、Introduction としてのアクティビティを操作することで解消できる。例えば、教科書本文の内容をもっと学ばせたい場合には、本文の内容に沿った活動（アクティビティ）を行うことで、本文の内容を簡単に理解させることができるのではないかな。毎時の目的に沿ったアクティビティを選択して、作ってほしい。</p> <p>Speaking のアクティビティを作る際には、授業を行う生徒のレベルを考えて、作ることが大事である。実生活においては、private speech でのコミュニケーションをとる場面の方が、公で話す場面よりも多い。その点を踏まえ、実際の授業では実生活により結びつく場面を設定して、アクティビティをさせてほしい。</p>

2 探究活動について

瀬々 將吏

平成29年度探究活動等実践モデル校事業報告書

学校番号	40	学校名	秋田県立横手清陵学院高等学校
記載者 職・氏名	教諭 瀬々 将吏		

今年度の実施内容

1 研究の目的

これまでの実践の成果を基に、課題研究を中心とした教科横断的な探究活動を全校規模で実施することにより、本校が育成を目指す資質・能力を育成する。

2 研究の内容

「総合的な学習の時間」において、高校1年生と高校2年生の全員を対象として課題研究を実施する。研究テーマとして、学問や社会に明確に位置づけられ、新しい価値を産み出すものを、生徒の自主性を尊重して設定させる。

3 今年度の取組状況

実施した事業の名称・対象者・期間を表1に示す。

表1 平成29年度の事業内容

内容	対象者	4月～9月	10月～12月	1月～3月
探究基礎	高1 普通科			●
探究	高2 普通科	●	●	●
探究基礎	高1 総合技術科	●	●	●
探究	高2 総合技術科		●	●

(1) 普通科

ア 探究基礎 (高校1年次、1単位、1月～3月)

2年次の「探究」への導入として、12月までに「社会と情報」で学んだスキルを活用し、初歩的な課題研究を行った。実施内容と時期の概要を表2に示す。また、詳細は添付資料に示す。

表2 普通科「探究基礎」の概要

時期	活動内容
11月	ガイダンス・グループ編成 テーマ決定 調査・検証
12月～1月	調査・検証
2月	クラス内発表会 論文執筆
3月	論文執筆 学年発表会

1クラス（35名程度）を7班に分け、指導者（学級担任）の指導のもと探究活動を行った。専門的な内容については、各教科の教員に依頼して指導を行った。

2月9日（金）にクラス内発表を行い、生徒の相互評価と教員による評価により、クラス代表を決定した。3月16日（金）に学年発表会を行う予定である。

イ 探究 （高校2年次、2単位、通年）

生徒は、全校・全学年の教員が指導する「ゼミ」に分かれて、課題研究を行った。資料2に示す年間計画に従って、9月には中間報告、11月に全校発表会を実施した。教育実習生、大学教員、博士号教員などの指導助言を受けた。また、以下の外部発表会で成果発表を行った。

①平成30年1月7日～1月12日

平成29年度秋田の教育資産を活用した海外交流促進事業
バンコククリスチャンカレッジ

②平成30年1月26日（金）・27日（土）

秋田市にぎわい交流館 AU（あう）
東北地区サイエンスコミュニティ研究校発表会

③平成30年2月4日（日）

秋田県スーパーサイエンスハイスクール指定校等合同発表会
秋田拠点センター アルヴェ（1F：きらめき広場）

(2) 総合技術科

ア 探究基礎 (高校1年次、3単位、通年)

高校2年「探究」、高校3年「課題研究」の活動に生かすため、研究題材について調査する能力とプレゼンテーション技能の育成を行った。

主なテーマ

- ・「竹とんぼの滞空時間の研究」
- ・「世界の刃物」→生徒たちが研究し、自分たちで小刀をつくる。
- ・「耐震性、耐久性の高い家を設計する」

イ 探究 (高校2年次、2単位、10月～)

7つのゼミに分かれて、3年生「課題研究」につながるテーマで探究活動を行った。テーマは教員側から提示する形で、生徒が希望するものを選択した。生徒が所属する3類型(環境、情報、システム)の枠内でテーマを選択した。テーマ一覧を添付資料に示す。

成果と課題

1 成果

全体として、全校・全学年で、主体的な探究活動に取り組む基盤が整備された。高等学校1・2年の全ての生徒が課題研究に取り組むことができている。以下にその詳細を示す。

ア 普通科「探究基礎」の運営改善

特に高校1年生「探究基礎」を学年一斉展開としたことにより、教員の負担が減り、運営の目標や意図が学年全体で共有できるようになった。

イ 普通科「探究」の充実

外部発表会やサイエンスダイアログなど、多様な取組に高い意欲で望む生徒を育成できた。SSHに指定されていたころの研究体制を良い形で引き継いできている。

ウ 総合技術科「探究基礎」「探究」の充実

総合技術科においても課題研究の取組が活性化した。高校1年生「探究基礎」においては、3月の学年発表会を普通科と合同で実施することとし、文字通り学年全体で

取り組めるようになった。高校2年生においても、ルーブリックを開発し、研究発表会の評価を行っている。

2 課題

次年度へ向けた課題は以下の2点である。

ア 旅費の確保

外部発表会等の生徒旅費は本事業から支援されず、捻出に苦勞している。生徒の旅費を支援できるよう、ぜひお願いしたい。それとともに、校内でも継続的に旅費を確保する方法について、検討を重ねていきたい。

イ 研究目標や評価方法の共有

中学校、高等学校全てを統括する、探究活動の目標の浸透や、情報共有に関する制度の整備が遅れてしまった。本校は、中学校・高等学校・総合技術科の3部門がそれぞれの教育課程のもとで活動している。互いに情報を共有し、同じ目標に向かっていけるようにするための手立てを、今年度末から計画していく。

3 年次研修の記録

(1) 高等学校初任者研修 三浦 俊喜

(2) 高等学校5年経験者研修 高橋 恵

(3) 高等学校授業力向上研修 高橋 恵

(4) 高等学校中堅教諭資質向上研修

栗津 奈々

平成 29 年度 初任者研修を終えて

国語科 三浦 俊喜

1. はじめに

4月に辞令交付を受け、本校に赴任してから間もなく一年が経とうとしている。思い返すと、多くの先生方のご指導を受けながら日々の業務に取り組んでいるうちに、いつの間にか今年度も終盤に差し掛かっていたという印象がある。あらためて今年度行った多くの研修を思い返し、この1年を振り返りたいと思う。

2. 校内研修

2.1 教科研修

指導教員の宮原先生をはじめ、多くの先生に授業を見ていただき、多くのご助言をいただいた。また、他の先生方の授業を参観し、自らの授業改善に向けて重要な示唆を得ることができた。

一年間の教科研修を通して、目標設定の重要性をとくに強く意識するようになった。授業の細かな技術や授業構成は、突き詰めるとその授業の目標を達成するための要素である。研究授業を行う際も、ともすれば「どのような言語活動を取り入れるか」ということに重きを置いて指導案を考えてしまいがちであった。しかし、講義や研究授業後の協議の中で、繰り返し「どのような力をつけるための活動なのか」という視点の重要性についてお話しいただいた。まずは1時間の授業を通して生徒にどのような力をつけさせたいかを明確にしたうえで、その達成に向けて、授業構成や発問のしかたを考えなければならない。さらに、その目標を設定するためには、年間を通しての指導計画の中での位置づけや生徒の現状を十分に理解していなければならない。これらのことを強く実感した。

年度当初と比べると、教科指導に関する自分の視野が大きく広がったと感じている。研修の中で発見した自らの課題を克服し、より生徒の成長に寄与する指導ができるよう、今後も授業改善に努めていきたい。

2.2 一般研修

西村校長先生、佐藤教頭先生をはじめ多くの先生方に教諭としての心構えや分掌の運営について教えていただいた。他校に講師として勤務していたときにもさまざまな校務を担当していたが、研修を通してそれらの業務の意義や重要性に気づくことができた。本校は中高一貫であり、また普通科と総合技術科が併設されている、ある意味では特殊な学校である。学校行事や生徒指導、進路指導など種々の業務も、その特色に合わせて運営されている。本校の運営のために自分はどのように貢献できるだろうかと、深く考えさせられた。

3.校外研修

校外研修は、主に秋田県総合教育センターで、おおよそ月に1回の頻度で行われた。教科指導や、生徒指導、HR運営など多岐にわたる内容の研修を受講した。今回はその中でもとりわけ印象深いものを振り返る。

3.1 PA (Project Adventure) 研修 (岩城少年自然の家)

PA研修は、8月に岩城少年自然の家で実施された。これは集団生活と課題達成の過程を通し、人間関係の在り方や集団づくり、体験的な学習の方法について実践的に学ぶ研修である。「実践的に」とは、この場合私を含めた初任者自身が課題解決に取り組むということである。高等学校の初任者だけでなく、特別支援学校の初任者と合同で研修が行われたため、参加者の半数以上が初対面の先生方であったが、さまざまな活動に取り組む中で、関係を築き、信頼を育むことができた。活動が終了した後、PA (Project Adventure) について講義を受けた。そこで、何気ない交流活動のように思われたプログラムの一つ一つが、綿密に計画・工夫されたものであるということを知った。PAそのものを学校現場で行うことはできないと思うが、集団づくりの工夫や信頼関係の重要性など、日々の指導のヒントを得ることができた。

3.2 授業研修 C (秋田北高校)

11月に秋田北高校に赴いて授業研修を行った。初対面の生徒を相手に、国語科の初任者2名がそれぞれ授業を行った他、教育専門官の授業を見学させていただくことができた。学力や雰囲気なども分からないまま始まった授業であったが、生徒たちが積極的に反応し活動に取り組んでくれたため、スムーズに進行することができた。ICT・教具の活用のしかたや生徒の発言を生かし方などの課題も見つかり、よい経験になったと思う。

そのほかにも特別支援学校の訪問や秋田中央高校に赴いての教育専門官の授業見学、秋田明德館高校の訪問など、校内の業務だけでは触れることのできない教育の現場を見ることができ、多くのことを勉強させていただいた。今自分がもっている指導力をより一層向上させられるよう今後も努力していきたい。

4.最後に

4月から教諭としての職務が始まり、講師であった昨年度までとは比べ物にならない責任の重さを感じながら過ごした一年であった。悩むことも数多くあったが、日々の指導の中で研修から学んだことを実践し自分の能力を高めることができ、大変貴重な体験となった。指導教員の宮原公先生をはじめ、一年間多くのことをご教示してくださった先生方へ感謝申し上げます。本当にありがとうございました。これからも初心を忘れず、指導力向上のため研鑽を積んで参ります。

高等学校教職 5 年経験者研修を終えて

英語科 教諭 高橋 恵

【 はじめに 】

今年度は育児休暇取得後の復職ということもあり、数々の研修機会を非常に貴重なものと感じることができた。中でもこの研修は、五年の教職経験を経た教員同士が悩みや課題を共有し、改善のために学びあう機会として非常に充実したものであった。これまでの自分の役割を振り返るとともに、気持ちを新たにこれからの取り組みに活かせるための学びができた。

【 研修項目および感想 】

I 期 6月16日（金） 秋田県総合教育センター

○日程

10:00～12:00 < 講義・演習 > 「生徒理解と人間関係づくり」

13:00～14:00 < 講義・演習 > 「学校教育目標とホームルーム経営」

14:10～16:15 < 講義・協議・演習 > 「これからの高等学校に求められる授業改善①」

○「生徒理解と人間関係づくり」

生徒理解における様々な考え方や方法を講義で学ぶとともに、実際に演習を通して体験できたことで理解が深まった。生徒理解では、円環的思考が大事であると学んだ。特に人間関係の問題には、円環的思考で取り組んだ方が問題解決への道が開ける。そして教師側には、生徒が見せる行動の裏に隠された目的に対して、適切な対応が求められる。複数の教員でその対応にあたるのが望ましいため、共通理解や共通実践を目指すべきである。最後に発達障害への支援を考える必要があることがあるが、その際、発達障害の特性を理解し、それに合った指導を学ぶ必要がある。専門機関との連携や、各校での取り組みを参考にするなど、よりよい指導を目指して協力することが大切である。

○「学校目標とホームルーム経営」

学校目標の意味や到達のための方法を具体的に考えるうえでも、ホームルーム経営をする際の目標設定や到達の手立てを考えるうえでも、知っておくべきものとして SWOT 分析の活用について学んだ。演習を通して理解を深めることができた。学校においても、学級経営においても、自分が果たすべき行動や役割を考える際に、SWOT 分析を活用することでより機能的に考え、行動することができるのを実感した。さらに学級経営においては、特色づくりのための手法として SWOT を活用できると、課題やすべきことが見えてくることが分かった。

○「これからの高等学校に求められる授業改善①」

教科別での講義、協議、演習であった。日々の授業で、①4技能の総合的・統合的指導②言語活動中心の授業展開③生徒の考える力の育成④自立した学習者の育成、を目指すことを意識する必要性を確認した。その後、受講者同士で日々の指導における悩みや課題を共有し、改善策を協議した。

○日程

10:00～12:00 < 講義・演習 > 「教師が使えるカウンセリングの技法」

13:00～16:15 < 講義・協議・演習 > 「これからの高等学校に求められる授業改善②」

○「教師が使えるカウンセリングの技法」

教育相談にあたって大切な考え方は、円環的思考である。その実践を通して留意することは、生徒は心理的事実を受け入れてもらえると、客観的事実に向き合えるようになるということである。それを心に留めて生徒相談にあたるのだが、生徒との間に信頼関係がなければうまくはいかない。信頼構築のための技法として「解決志向ブリーフセラピー」について学び、実際には、「コーピング・クエスチョン」や「スケーリング・クエスチョン」などを体験した。生徒との信頼関係が指導に影響し、生徒を通じて保護者、地域住民に直接的・間接的につながっていることを忘れてはいけない。

○「これからの高等学校求められる授業改善②」

教科別に分かれての研修だったが、I期で共有した悩みや課題に対する解決策を模索しながら、日ごろの授業実践をお互いに観察し、アドバイスし合うというものだった。同じように悩みや課題を抱えつつも、他の先生方の実践を拝見できたことは、非常に大きな学習となった。また、自分では見えにくい自分自身の姿を客観的に見る機会となり、新たな発見があるとともに、改善点が明確になった。今後の授業改善への意欲と改善のためのヒントは、様々な講義で受けた内容も一つだが、他の先生方の努力されている姿が一番影響力の大きいものとなった。

【 おわりに 】

今回の研修を通して、「感覚」として何となく感じていたものが、講義を通して「理論」として整理されたものが多かった。生徒指導においても教科指導においても、慣れてきたがゆえに抱く課題もあった。そのような課題に対して、どのように取り組むべきか、どのような手立てがあるのか等、多くの学びがあった研修であった。

研修を受けるにあたり、多くの先生方にご指導・ご助言をいただき感謝している。今後も様々な経験を通して、生徒に寄り添い、できることが何なのかを日々模索しながら努力を重ねられる教員でありたい。

高等学校 授業力向上研修を終えて

英語科 教諭 高橋 恵

【 はじめに 】

採用3年目、8年目の教員を対象に実施された研修で、授業分析や教員同士の協議などの実践的な研修を通して授業力の向上を図る目的の研修であった。今回は、中学校教員との合同研修だったため、校種を超えて授業観察したり、お互いに助言し合うなど、非常に実り多い機会となった。特に私自身にとっては、生徒が高校入学後に陥ることの多い高1ギャップについて考えたり、6年間通した英語教育について考えたりする、有意義な機会になった。

【 研修項目および感想 】

I 期 9月25日(月) 秋田県総合教育センター

○日程

10:25~12:00 < 演習・協議 > 「グループ別授業分析①」

13:00~16:15 < 演習・協議 > 「グループ別授業分析②」

II 期 9月26日(火) 秋田県総合教育センター

○日程

10:00~12:00 < 演習・協議 > 「グループ別授業分析③」

13:00~15:30 < 演習・協議 > 「グループ別授業分析④」

15:30~16:15 「スピーチコンテスト入賞者 発表」

二日間の授業分析では、中学校・高等学校の英語科教員が二つのグループに分かれて、お互いの授業を視聴し、分析・協議する、という研修が行われた。各教員は、一コマの授業を録画したものをDVDで持参し、自分で課題として取り組んでいる観点から授業を視聴してもらい、助言をもらった。視聴する教員は、質疑応答を経て、自分の意見を付箋にまとめて提示した。各教員が掲げた課題には、「目標設定と達成のための授業展開になっているか」「生徒自身の発信となる言語活動の構築が効果的になされているか」など、校種を超えて共通の課題となり得るものがたくさん含まれており、お互いの学びになった。

【 おわりに 】

日々の授業の中で、中学校での授業も経験しているが、様々な中学校の先生方の授業実践を見させていただくことで、新たな発見や学びがたくさんあった。特に、授業のねらいとその評価方法の整合性を考えるという点が、現在の私にとって必要な課題であることが分かった。同時に、そのねらいを達成するために構築しているコミュニケーション活動が効果的か否か、という点において、様々な指摘とともに代替アイデアを得る機会があり、豊富な引き出しが常に必要であることを痛感した。

教科指導上の自分の課題としてあげた2点について、①まとめとしてのライティングは、活動で用いた表現を文字に起こす、というサイクルを構築する、②生徒の主体性を引き出す方法の一つとして、タスクベースの活動を組み込む、という結論に至った。また、個への指導に関して悩みを感じていたが、主体的活動を取り入れた上で、できあがってきた生徒の成果を自分だけでなく、ALTなども活用し複数の目で評価してみることが一つの解決策であることを学んだ。

学びの多い研修となったが、校種を超えてたくさんの先生方の授業を拝見させてもらったことが大きな刺激となった。この気持ちを大事にし、今後の授業に活かしていきたい。

高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて

家庭科 教諭 栗津 奈々

1. はじめに

今年度、中堅教諭等資質向上研修を行った。主に総合教育センターでの講義による研修と、金足農業高校と本校での授業研修、企業で3日間行う選択研修である。研修を通して、これまでの教員生活を振り返り、これからの課題を確認することができた。

2. 総合教育センター研修、および高校教育課担当研修について

【センター研修】

I 期	○質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略 ○学校の危機管理 ○学校組織の一員として①
II 期	○授業づくりと授業研究の実際 ○これからの高等学校に求められる教科指導の在り方
III 期	○いじめの理解と対応 ○教育相談の考え方・進め方 ○気になる生徒の事例を通じた具体的対応の理解
IV 期	○教育活動全体を通じたキャリア教育 ○学校全体で取り組む情報教育 ○豊かな自己形成に資する道德教育の在り方
V 期	○教育公務員の服務 ○学校組織の一員として② ○これからの学校教育

【高校教育課担当研修】

基礎研修	授業研修（授業実践・授業参観・協議）	選択研修（企業等体験研修）
------	--------------------	---------------

(1) 総合教育センター研修について

この研修を通して、中堅教員としての自覚をもち指導力の向上、得意分野の確立が求められていると強く感じた。今までは、自分の業務に専念し、責任を持って行動することを心掛けてきたが、本研修で学んだ事を生かし、学校全体に関わる業務を円滑に遂行するために、縦や横の連携を意識し取り組んだ。今年度は、特に教科指導を充実させることを目標にした。これまで教科一人配置校での勤務が多かったこともあり、校内での教科研修の機会が少なく、独り善がりな教科指導になっていないか不安に思う場面が多かった。私にとって、この研修は同じ教科の先生方と協議を重ね、教科の専門性を高める大変貴重な機会であった。

I・II・V期では、中堅教諭等資質向上研修の意義とその必要性、特定課題研究と選択研修の具体的な進め方について確認することができた。教師力とは想像力・言葉の力を中核に教科指導力、生徒指導力等から構成され、言葉は重要な意味をしめすという話があった。講義では「内言の外言化」の大切さについて強調されており、対話を通して深い学びを保証していくことが重要だと実感した。普段の授業を通して主体的で対話的な深い学びを実現させ、さらに生

徒といろいろなことについて話し合い、個性を伸ばしていきたい。

Ⅲ・Ⅳ期では、いじめの理解や教育相談など、私自身が指導の不安を感じている分野の研修であった。生徒や保護者の訴えに真摯に受け止め、即時対応ができる教員にならなければならない。一人で抱えるのではなく、組織で対応することの重要性を知り、まずは日頃から教員間の関係を円滑にしていきたいと感じた。また、中高一貫校である本校での特質をいかして、6年間を見通したキャリア教育、道徳教育の在り方を検討していくことも大事ではないかと考えさせられた。また、情報教育の講義では、授業にすぐに活用できそうな情報教育機材や指導の視点を教えていただいた。実際に校内研究授業において、ICTを取り入れた授業実践につなげることができた。

以上の研修から学んだことを生かし、個に応じた指導を展開し、魅力ある生徒を育てることができるよう日々、研修していきたい。

(2) 教科指導等研修（9月4日、金足農業高校）

2年生物資源学科で「家庭総合」の「子どもの発達と保育・福祉」の分野の授業を行った。研究授業では、グループワークからの気づきを全体で共有し、深い学びにつなげることを意識したのだが、時間配分が甘く、そのねらいは達成するには至らなかった。生徒の理解力や雰囲気を感じながら授業を行ったが、初めてのクラスで授業することは、なかなか難しさを感じた。反省が多い授業になってしまったが、研究協議で率直な意見や助言をいただくことで、授業改善のヒントをたくさんいただくことができた。日々の授業に役立て、これからも授業改善に努めていきたい。

3. 特定課題研究

研究テーマ	衣生活分野におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫
研究方法	一斉授業の中で、安全、安心で居心地の良い授業を展開し、生徒の実態に応じて教科のねらいを達成するために、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫を行う。

(詳細は「特定課題研究レポート」)

4. 選択研修（企業等体験）

期間	平成29年7月24日（月）～7月26日（水）（3日間）
研修先	社会福祉法人睦福祉会 むつみ乳児保育園

(詳細は「選択研修報告書」)

5. おわりに

中堅教諭等資質向上研修の最後の講義で、これからの学校教育の講義があった。今後は、現在、存在しない職業が多くなり、時代に求められる資質、能力と、それを培う教育、教師の在り方も多様化していくということである。変貌する社会を生き抜ける生徒の育成のため、研修に励みたい。

最後に、校長先生をはじめ多くの先生方からご指導をいただき、厚く御礼申し上げます。今後の教育活動に生かしていきたいと思っております。ありがとうございました。

選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	秋田県立横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭・粟津 奈々
研 修 先	社会福祉法人睦福社会 むつみ乳児保育園		
研 修 期 間	平成29年7月24日（月） ～ 平成29年7月26日（水）		
<p>1 研修の概要</p> <p>7月24日（月） オリエンテーション・保育補助・食事やおやつ補助 むつみ保育園年長児のセカンドステップの見学</p> <p>7月25日（火） ノーバディズ・パーフェクトプログラムの参加 保育補助・食事やおやつ補助・ベビーマッサージの実習</p> <p>7月26日（水） 保育補助・食事やおやつ補助・プール遊びの補助・研修の振り返り</p> <p>2 研修の成果</p> <p>今回の研修では、人としての基礎づくりに重要な時期である乳幼児期の保育の現状を知り、具体的な保育実践を学ぶ機会となった。初日に、むつみ保育園の年長児のセカンドステップを見学させていただいた。1章「相互理解（相手の理解から自分自身の理解を深める）」、2章「問題解決」、3章「怒りのコントロール」の3段階で人間関係構築のための社会的スキルの習得を目指す内容であった。この日は3人の子供（割りこみをした子供とされた子供、傍観者）が写っている写真を用いて、状況や気持ちを発表させ、ロールプレイングを行うというものであった。子供たちがどのような話し方をするか相手に気持ちが伝わるかを真剣に考え、熱心にロールプレイングに取り組む姿に驚いた。幼児期から考える力、生きる力を育みたいという園の方針で10年ほど前から取り入れているそうだが、友だちとのトラブルが増え始める時期ではあるが、計画的にコミュニケーションスキルを学習することによって、自ら解決方法を考えることができるようになること、幼児期にこのような学びの機会が得られることは大きな意味があると感銘を受けた。</p> <p>2日目にはノーバディズ・パーフェクトプログラムに参加させていただいた。「子育ては完璧でなくて良い」との共通理解のもと、ファシリテーター役の柴田静寛先生（スクールカウンセラー）と子育て中の親が一つのテーマについてフリートークをする中で、子育ての悩みを打ち明け、子育てのヒントを見つけていくというプログラムであった。私自身、二児の母親の立場で参加させていただいたが、各家庭の状況は違っても、皆同じような悩みを抱え、もがきながら悩みながら子育てに当たっていることを知ることができた。</p> <p>また、年長児がご飯を炊くところから一日がスタートしたり、包丁やガスを使用してクッキング保育に挑戦したりと食育の取り組みも紹介していただいた。食事は添加物を一切使わず薄味で素材そのものを味わえるように献立を工夫したり、おやつは捕食と考え、すべて手作りでうどんや野菜入りスコーン、自家製ヨーグルトなどを提供したりしており、食経験は子供を育てる大切な要素だと考えさせられた。</p> <p>3日間の研修を通して、保育園の存在は、園児本人はもとより、その保護者、そして地域の子育て環境を支える重要な役割を担っていることを理解することができた。これから将来を担っていく未来ある子供たちを育てていくということは、学校、家庭、地域社会が連携して、子育て環境をより良いものにしていく必要性を感じた。目の前にいる生徒たちは、乳幼児期から大切に育てられて今に至っていることを重く受け止め、その成長の過程をしっかりと見つめ、生徒たちの可能性を伸ばしていける教師になりたいと強く感じた。教育者として大切なことに気づかされた研修であった。このような機会を得られたことに感謝し、これからの教員生活に臨んでいきたい。</p>			

特定課題研究レポート

所属校	秋田県立横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 粟津 奈々
研究分野	(A) 教科指導 B 学級・学年・学校経営 C 生徒指導 D 進路指導 E 特別活動に係る指導 F 総合的な学習の時間に係る指導 G 特別支援教育に係る指導 H その他		
研究テーマ	衣生活分野におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫		
<p>1 研究の概要</p> <p>《テーマ設定の理由》</p> <p>一斉授業の中で、生徒の実態に応じて教科のねらいを達成していくためには、生徒一人一人が安全で安心して授業や実習に取り組み、主体的・対話的に活動し、学びを深めていくことが求められる。ユニバーサルデザイン（UD）の視点を教科指導に取り入れることで、特別な支援が必要な生徒に限らず、すべての生徒の学習面でのつまづきや多様なニーズに対応していくことが可能であり、より多くの生徒の理解に通じることから、このテーマを設定した。</p> <p>《方法》</p> <p>① 特別支援教育の研修と中学校の先生方の授業参観を通して、ユニバーサルデザインを取り入れた授業実践を学びながら授業に反映させる。</p> <p>② 授業研究を通して、授業形態や効果的な補助教材について研究する。</p> <p>《対象科目と単元、授業での取り組みとUDの視点》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校1年生「技術・家庭」 衣生活と自立 ・ 高等学校1年生「家庭基礎」 衣生活をつくる <p>【環境の工夫】 活動の流れや時間の提示・活動に応じた教材と道具の精選・教室での実習などの工夫で「時間と場の構造化」を図る。</p> <p>【情報伝達の工夫】 具体物の提示・プレゼンテーションや視聴覚教材などのICTの活用により「視覚化」を図る。</p> <p>【授業形態の工夫】 I 段階的な指示やワークシートの工夫により学習内容の「焦点化」を図る。 II ペア学習やジグソー活動での学び合いで「学習内容の共有化」を図る。 III 時間を区切った実技実習など授業スタイルをパターン化し「展開の構造化」を図る。 IV 課題や実技の難易度を調整して「スモールステップ化」を図る。</p> <p>【相互理解の工夫】 構成的グループエンカウンターを取り入れ、互いに認め合う関係づくりを図る。</p> <p>2 成果と課題</p> <p>《成果》</p> <p>環境・情報伝達・授業形態・相互理解の4つの観点を意識することによって、想定される学習面でのつまづきに、ある程度、対応できるようになった。特に時間を区切って、段階的に実技指導に取り組みさせたことで、生徒たちの集中力が維持し、落ち着いて実技実習に取り組むことができるようになった。また、構成的グループエンカウンターを取り入れたオリエンテーションの実施により、間違いやわからないことを受容できる関係の中で、話し合い、協力し合う場面が生まれ、クラス全体での理解が進んだ。教師一人で生徒一人一人に事細かな技術指導を行うには限界があるが、学び合う関係が構築したことで、効果的にペア学習やグループ学習が行えるようになった。</p> <p>《課題》</p> <p>今後は想定外のとつまづきにも柔軟に対応できるように教材研修を重ねるとともに、生徒理解にも努め、より一層、一人一人の理解に応じた授業づくりをしていくことが課題である。</p> <p>また、被服実習での学習の目標が「〇〇を完成させる」など、製作の目標に過ぎないことも多かった。生徒の疑問を引き出し、質的な目標を設定して主体的で対話的な学習に作り上げていくことが今後の課題である。</p>			

編 集 後 記

「平成29年度研究紀要第13号」の発刊にあたり、校務御多忙の中、貴重な原稿をお寄せ下さった先生方に、深く感謝申し上げます。

この研究紀要が今後の先生方の研修等に、少しでもお役に立てれば幸いです。

研修・国際部

平成29年度 研究紀要

第13号

発行 秋田県立横手清陵学院 中学校・高等学校
秋田県横手市大沢字前田147番地の1
電 話 0182-35-4033
FAX 0182-35-4034